東京教区時報

フェスティバル《特別号》

2010年10月10日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3―6―18
編集人　英　久子

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.htm E-MAIL:comm.tko@nskk.org
Phone:03-3433-0987, Fax:03-3433-8678 Diocese Office

天の父なる神様、どうぞ私たちの心をあなたの聖霊によって整え、み子イエス・キリストの福音で私たちを豊かに養ってください、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

本日、東京教区の「2010フェスティバル」にお招きをいただきまして、心から感謝いたします。小さな事にこだわるようではありますけれども、ひとこと苦言を申し上げたいのは、この今日の説教はもうずいぶん前、たぶん今年の4月頃に頼まれました。田光司祭からお電話があって、「今年の教区フェスティバルでの説教を、首座主教にお願いしたい」とおっしゃいましたので、私は「首座主教の任期は5月で終わるので（笑）、その先は首座主教かどうか分からないのだから、それだったら受けられない」、そう申しましたら、田光司祭は「いやいや、違います。北海道教区の主教として説教していただきたい」（笑）。私は「それならば今のところ予定が空いているのでお受けしましょう」。それで今日来

◇東京教区2010フェスティバル礼拝説教◇

日々の小さな営みと復活の希望

北海道教区主教　ナタナエル　植松　誠

ましたら、プログラムに「首座主教」と書いてあるんですね(笑)。何かだまされたような思いがいたしますけれども(笑)、あくまで今日私は北海道教区の主教として、皆様にお話し申し上げたいと思っております。

今日、この礼拝堂、私は植田主教様の主教按手式以来です。9月末をもってその植田主教様がご退任になられる。本当に深い思いを持ちながら今日私はここに立っております。長い間の主教様のお働きに、あ、今は首座主教です(笑)、日本聖公会を代表しまして、首座主教として本当に感謝申し上げたいと思います。

さて、15年程前、私は管区事務所の総主事をしておりました。東京に住み、日曜日には東京教区のいくつかの教会で礼拝のご奉仕をさせていただいておりました。いくつもの教会に参りましたので、今日、その信徒の方たちの顔、何人かの方たちのお顔を思い出しながら、ああ、あの方もいらしてる、この方もいらしてると嬉しい思いがいたします。その当時、我が家では中学生の息子が不登校になるなど、かなり辛い時期でもありました。私自身、そのようなことで自分の中で心の平静を失っており、福音の喜びを説教で語ることに困難を感じておりました。「もう主日礼拝の説教を頼まれても引き受けない。とても説教など今の状況でできない」と、家内に言ったことがあります。その時に家内が私に言ったことを今も、はっきりと覚えています。「誰でも順境の時に、感謝だとか喜びだとか、希望などということは簡単に言える。でも大事なことは、逆境の時に、いかに福音を福音として受け入れるかということ。そして、あなたはまさに、そのような中で福音を語るために召されているのではないのか」と。司祭としてまったくお恥ずかしい話ですが、今では、その東京での辛く苦しい時期が、神様の憐れみの御手の中で、恵みに変えられたことを感謝し、今日、その現場に里

帰りしていることに深い感慨を覚えます。

◇

私は度々、海外で開かれる集まりに出席する機会があります。一昨年は英国でランベス会議に出ましたし、また昨年は世界の首座主教会議がエジプトで開かれました。そのようなところで外国の主教たちにいつも聞かれるのは、「あなたの教区は何人の信徒がいるのか、何人の聖職がいるのか」ということです。北海道教区の場合、現在受聖餐者数は約１１００人です。１１００と言う数字を英語で言いますと、イレブン・ハンドレッドですとか、ワン・サウザンド・アンド・ワン・ハンドレッド、そんな言い方がありますけれども、私、間違ってイレブン・サウザンドと言ってしまいました。つまり１万１千人ですね。でも「えっ、それだけなの？」と驚かれ（笑）、ついに「実は１１００人（イレブン・ハンドレッド）だ」とは言えなくなってしまいました。１１００人という数字は彼らの教区では多分一教会の信徒の数でしょう。北海道の現役聖職は16人です。気後れしながら、何となく言い訳のように、日本ではクリスチャンは人口の１％にも満たない、などとついつい言ってしまいます。

数年前に、英国ノッティンガムで開かれました全聖公会中央協議会、ＡＣＣと申しますけれども、ＡＣＣ13に私は日本聖公会を代表して出席しました。そしてその期間中の一主日、私はすぐ隣のレスター教区に招かれて、日本聖公会、北海道教区について講演をするように頼まれました。その依頼を受けた時に、私はあまり気乗りがしませんでした。北海道教区の現在受聖餐者数が１１００人。レスター教区の一教会の現在受聖餐者数よりも少ない。また一つの教区で教会が３４０もあるレスター教区、聖職者が３００人もいる、そんな英国の教区から見ると、北海道はあまりにも小さいし、日本聖公会全体としても本当に小さな管区である。そのことを思った時に、私はこの講演はとても気後れしてしまって、お断りしようと思いました。

昨年、エジプトのアレキサンドリアで首座主教会議がありました。昨年の今頃、日本聖公会宣教１５０周年の行事・礼拝が東京でありました。そういうところで、海外からの主教たちに日本の教会がいかに小さいかを話しますと、何度も聞かれたことは、「日本ではクリスチャンが人口の１％にも満たないとのことだけれど、その日本で、そもそもあなたはどうしてクリスチャンになったのか」ということ。そして、そのような非キリスト教社会で、あなたはどのように生きているのか」という問いでした。彼らにしてみると、日本におけるクリスチャンの存在というのはとても大きな驚きであり、クリスチャンがそこでどのように生きているか、大きな関心があったようです。

レスター教区での講演会は、始めはとても気後れしていましたが、意を決して、私たちの現実の教区・教会としての姿をありのままに語ることにしました。異教社会、異文化の中で、１％にも満たないキリスト者が、一生懸命自分の信仰に生きていること。経済不況や過疎化、人口全体の高齢化の中でも、教会のために力強く奉仕し、捧げている信徒たち。北海道の厳しい自然と広大な地で、いくつもの教会、中には２５０キロ、車で片道５時間もかかる教会の管理もしながら、牧者として心血を注いでいる聖職たち。ほんの小さな地の塩、世の光に過ぎない、これらの人々の教会・教区が、過去の戦争の際に平和の福音に立脚できなかったことの反省に立って、平和と和解の道具になろうとしていること、この世の小さくされた者たちと共に歩んでいこうとしている、それをお話しました。

反響は大変なものでした。レスター教区の聖職や信徒だけではなくて、そこに居合わせたアフリカなどからのＡＣＣの参加者たちから、北海道教区と姉妹教区になりたいとか、北海道教区内の教会と姉妹教会になりたいという申し出がありましたし、また青年の交流をしようとか、もっと詳しく日本や、北海道の教会のことを知りたいという手紙やＥメールが、その後も何通も届きました。

◇

昨年、私たちは日本聖公会の宣教１５０周年を祝いました。東京カテドラル聖マリア大聖堂での記念礼拝では、地元の東京教区の皆様の多大なご奉仕をいただきましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。裸足で宣教する、すなわち、日本聖公会が日本という地において、日本にいる人たちに、自分たちの言葉で、彼らにとっての福音を語ることの大切さを、カンタベリー大主教はその説教の中で力説されました。「こぎ出せ、沖へ」という主題で、日本聖公会の宣教１５１年目を過ごしていますが、私たちの宣教とはどのようなものでしょうか。「宣教とは何か」とよく尋ねられます。私は宣教はとても単純なことだと思っています。簡単に申しますと、宣教とはキリストの福音を証しすること。そして、人々をキリストの愛と交わりにお招きすること、それに尽きてしまうと思います。自分の言葉で、自分の生き方で、生きざまで、キリストを証しすること。人の言葉ではなくて自分の言葉で、み言葉を、イエス様の愛を、私への慈しみを、自

分にとっての喜びを、希望を、人々に語ること。牧師任せではなくて（笑）、あるいは教会の長老の信徒任せでもだめです。あなたがどのようにイエス様を、福音の喜びを伝えていくか、それに尽きる。私はいつもそのように思っています。宣教を語る時、確かに現状の困難な問題の指摘や分析も必要でしょう。でもそれ以上に、自分にとって、また教会として今、誇れること、嬉しいこと、希望や夢に目を向けることが大切ではないかと私は思います。それは決して現実逃避ではありません。キリストの福音に根ざした私たちの信仰のあり方だと思います。

◇

人口の1％にも満たないクリスチャン、「そもそもあなたは、どうしてクリスチャンなのか」「どのようにクリスチャンとして生きているのか？」この問いに対して、聖職・信徒もそれぞれが答えを出さなくてはなりません。なぜ私はクリスチャンなのか。クリスチャンであるということは、私にとってどれほどの意味があるのか。どれだけ私は自覚的な聖職・信徒なのでしょうか。

◇

このような視点から、いくつか北海道教区で起こったことをお話しさせていただきたいと思います。どれもが、主教である私に大きな励ましや希望、夢を与えてくれました。

昨年2月の土曜日から日曜日にかけて、札幌は豪雪でした。私も土曜日は一日中雪かきに追われました。日曜日の朝まで雪は降り止まず、鉄道やバスは遅れや運休が続出、道路も通行止めや大渋滞となりました。まあ、この分では今日の主日礼拝はみんな来られないだろうな、そう思って札幌キリスト教会に行って、私は驚きました。ほとんどいつもの日曜日と変わらないくらいの信徒が教会に来ていたからです。雪だるまのようになって歩いてきた人たち、大渋滞の中、タクシーで来た人、お年を召した信徒も多いのです。みんな口々に、「いやぁ、大変な雪ですねぇ」と言いながら、そこに悲壮感のようなものはないのです。「朝からずっと雪かきをしていて、気付いたらもう教会に行く時間だったの

で、朝ご飯も食べずに来ました。帰ってからまた雪かきです」と言う年配の女性信徒の声に私は唯々圧倒されていました。

◇

もう一つ主日礼拝の話をしましょう。数年前の12月22日が日曜日で、その日に釧路でクリスマス礼拝を守りました。極寒のクリスマスです。外は凍てつく寒さ。礼拝後の祝会で私の隣に座ったお年寄りを牧師が私に紹介しました。「このNさんは、この年、主日礼拝を休まずに守ろうと決意し、今日まで一回も休んだことがありません」と。80歳を越えたNさんは、お家も決して近くはなく、お身体もそれほど丈夫そうには見えませんでした。でもクリスマスの後、もう一回日曜日がありますね、12月の29日です。Nさんが29日に礼拝にいらしたかどうか私はとても気になっていました。でも大晦日に釧路の教会の信徒から速達が届き、それにNさんがついに全主日礼拝出席を果たしたと書いてありました。その手紙によると、たくさんの信徒が出席したということでした。クリスマス礼拝の次の日曜日、たいてい最後の日曜日になりますね。どうでしょう皆さんの教会は。多分一年間で一番（笑）信徒が来ない日曜日じゃないでしょうか（笑）。Nさんが最後の主日に来られるかどうかみんな気になって（笑）、多くの信徒が教会に集まった（笑）。そして、みんなでNさんの満願成就の喜びを共にしたというのです。主日礼拝に出ること、それは自分一人の信仰の営みにとどまりません。一人の信徒の主日礼拝の出席が周りの人々に、また聖職にも計り知れない大きな影響を与えるのです。

◇

秋になると北海道は急に冷え込み始めます。雪虫が舞い、霜が降りるようになると、もう初雪も間近です。私が車のタイヤを冬用に替えている時に、主教館のお向かいもお隣りも、大根を干し、植木にわらを巻きつけ、みんな結構忙しくなります。そのうちに雪が降り始め、降ったり融けたり積もったりを繰り返しながら根雪になります。漬物を漬けるにしても、雪かきにしても、かなり体力が要ります。しかし、それを60代、70代、時には80代の女性が黙々とやり続けます。その光景を見ていると、北海道の女性の強さをひしひしと感じます。今でこそ家の造りも温かく、便利な融雪機もあります。でも、数十年前なら、きっとどの地域でも豪雪の中の生活を余儀なくされていたはずです。北海道の厳しい寒さは、自分たちの生活が決して思い通りにはならないということを嫌という程、人々に思い知らせたことでしょう。その中で家族を守り、助けてきた女性たちの静かな強さを今も感じ取ることができます。そして私はイエス様のまわりにいた女性たちを思うのです。決して翔び抜けた賜物を持った人たちではなかった。いろいろな弱さや惨めな過去を持った人たちもいました。しかし、その消し去ってしまいたい自分の過去の重さのゆえに、そしてそこから逃げ出すことも出来ない哀しさのゆえに、黙々と一日一日を過ごす強さが養われていました。同じことの繰り返し、ほんの少しの希望すら見え隠れしてしまう

毎日の生活。毎日毎日、重石を並べていくような生活の中で、イエス様からの一筋の光を感じ取るのです。十字架につけられたイエス様を追ってきたのもこれらの女性たちでした。弟子たちとは違い、彼女たちはそのようなイエス様にも希望を持ち続けたからではなかったでしょうか。闇の中から逃げだそうとするのではなくて、闇の中の一筋の光りが途絶えることはないと信じて、光りを見ながら闇にいることに耐えた女性たち。そのような女性たちの生きざまからも私は大きな励ましを受けるのです。

◇

さて、地方の小さな教会の信徒が、どのような信仰を生きているかということで、私が大いに感動し、励まされたことをもう一つお話しさせてください。北海道のオホーツク圏にある紋別の教会を巡回した時のことです。前日から紋別に入り、その夜は何人かの信徒と一緒に町のレストランで食事をしました。隣のテーブルの人たちは少しお酒も入っていて、私たちが教会関係者であることを知って、一人の女性が突然声をかけてきました。「ねえ、あんたたち、教会に行っていて、いいことって何さ？」。私は何か言わなくてはならないと思って身構えました。その時、年配の信徒の一人がしばらくの沈黙の後、グーッと身を乗り出し、深く息を吸って、ゆっくりと力を込めて彼女に答えました。「クリスチャンになると、死を恐れなくなるんだよ」と。私はもう、その迫力にウーンと唸ってしまい、彼女はあわてて話題を変え、自分の仲間たちと話し始めました。80歳近いこの信徒は、長い生涯で多くの人の死に遭遇してきたに違いありません。その中には愛する家族や親しい友人の死もあったはずです。安らかに召された人だけでなく、苦しみもがきながら亡くなった人もいたことでしょう。彼自身、それらの死に涙したり、たまらない気持ちになったこともあったと思うのです。でも、人生の終焉に近づいたと自他共に認めざるを得ない、その彼の「クリスチャンになると、死を

恐れなくなる」という言葉は、聞く者にそれが真実だとうなずかせる説得力がありました。「死を恐れなくなる」という復活への希望こそ、私たちの信仰の真髄だ、という彼の証しは本物でした。

◇

私は毎年イースターの頃に、酪農とじゃがいもの産地として有名な今金のインマヌエル教会を巡回します。それはこの農村の教会がとても大事にしている「種の祝福」の礼拝をするためです。その年に蒔く種、種籾、麦、豆、種芋、トウモロコシ、そういうものを信徒たちは持ってきて祭壇の前に供え、私が聖水を振って祝福の祈りを捧げます。私はこの「種の祝福式」に毎回とても大きな感動を覚えます。それはこれが私たちの復活の信仰と結びついているからです。長く厳しい北海道の冬はすべての生命の痕跡を消してしまい、この「種の祝福式」の時も、雪に覆われ凍った大地は一面死の世界のようです。なんの希望も夢もそこには見られません。この死の世界の中で、農業に従事する信徒たちは、復活の主の生命が与えられることを信じて静かに待ちます。今の現実がどんなに暗くても、どんなに厳しくても、それが永遠に続くのではなく、主の溢れる生命と恵みが与えられ、秋には豊かな収穫が得られると信じて、今からその収穫の喜びを先取りしているのです。

◇

ゴルゴダの丘の彼方に復活があることを既に知っている私たちには、いつも一条の光り、希望と夢があります。この希望と夢に目を向けつつ、順境の時も、逆境の時も、日々の小さな信仰の営みを忠実に続けていく、そのことを大切にしていきたいものです。

東京教区の上に主の豊かな祝福がありますように。

アーメン

《東京教区　２０１０フェスティバル》
２０１０年９月20日　立教女学院聖マリア礼拝堂
［編集・制作　広報委員会］